

陸軍ニュース：一帯一路戦略と中国陸軍

漢和防務評論 20150906 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

1999 年に戦略論文「超限戦」を著した中国軍人が、最近”一帯一路戦略は中国陸軍に航空化を求めている”との趣旨の論文を発表し KDR がその内容を記事にしましたので紹介します。

この論文の内容を見ると、論文著者は”一帯一路”戦略立案に関わっていないように見えます。著者は、陸上の”一帯”が主で、海上の”一路”は従であると述べています。”一帯”戦略は、唐の時代には”朝貢”の形で行われていた。現代は、これをバックアップするのが陸軍の任務であると述べています。

KDR 編集部

最近、中国陸軍少将で国防大学教授の喬良は、”一帯一路戦略は、中国陸軍に航空化(”飛起来”)を求めている”と題する論文を著したことに KDR は関心を持った。同論文の著者は、十数年前(注：1999 年)に論文「超限戦」を著した人物である。

同論文の要点は：

”一帯一路戦略は、中国軍がグローバル化に向かう出発点である”

”如何なる帝国も勃興する際には、拡張期の到来に乗じて自らグローバル化を展開する”

一帯一路戦略はどのように進めるべきか？政治・外交を先行させ、軍事を後ろ盾にする。両線出撃、双路並挙.....。

”帯”が主で、”路”は従である。”一路”は補助攻撃で、”一帯”は主攻方向である。....我々が陸軍に求めるものは遠征能力である。

”一帯一路”戦略に対して中国陸軍が負う任務は自国を防衛することではなく、”一帯”に沿った陸上遠征力を具備し展示することである。”一帯”の経路上には、22 個の国家を数えることが出来る。.....陸軍の作戦能力を高めなければならない。中国陸軍は、空輸力を高め、航空化を実現しなければならない....と。

同論文の作者は、重型戦車を全力で開発する意義を否定し、”一帯”の経路上では重型戦車を展開させる余地は無いと述べた。

これと同時に、中国軍の改革立案者達は、各種の高級軍事会議の席上で、将来の新たな戦区(軍区)の設定法に就いて主張した。すなわち現行の 7 大戦区に代わる新たな戦区とは、国境の前方 1000 km の範囲を作戦範囲に含めるべきとする案である。

中国軍は、現在新たな軍事革命に直面していると主張し、その中で、陸軍派と海空

軍派が、それぞれこの革命の主役であると主張、後者は、陸軍の働きを低く評価し始めている。しかし喬良の上述の論文は、陸軍の働きを改めて定義し直したものであり、陸軍の利益集団も自己の効果的な利益を積極的に主張している。

(現代の朝貢関係の設立)

昔、唐の時代に、李世民皇帝は、当時の” 一帯” の軍事力を高度に重視していた。当時の” 一帯” 地域には多くの国家が存在していた。基本的には今日の新疆地域及び蒙古一帯を指し、当時の草原 18 部落を含んでいた。これらの国家は、李世民時代に唐の付属国になったが、依然として独立した国家であった。彼らと唐の首都長安は、朝貢ルートによって繋がっていた。” 朝貢ルート” はすなわち当時の” 一帯” である。これらの国家間の戦争では、ある時は脅威となる” 朝貢ルート” を封鎖した。唐は、何度も出兵し、” 一帯” 国家の反乱を鎮圧した。最後は、反乱国家を一気に唐に併合し、一地方行政区とした。

今日の” 一帯” 地域は、どのくらいの広さがあるのか？陸軍少将の上述の論文は次のように説明している：22 個の国家を含む、と。KDR は、これらの国家の広さを、中央アジアから中東全体を覆い、東部アフリカに至る範囲であると分析した。これらの国家の多くは、中国にエネルギー資源を提供している。

このように分析すると、” 一帯一路” 戦略と中国陸軍の関係が明確になる。中国軍の陸軍派は、” 一帯一路” 戦略の名を借りて軍改革の主導権を奪還しようとしている。陸軍派は、中国軍の伝統である” 陸軍第一” の地位を奪われたくないのである。實際上、西部の 2 つの大軍区、成都及び蘭州軍区の陸軍部隊は、近年来、大規模に強化されている。蘭州軍区を例にとると、2 大集団軍及び新疆軍区の兵員総数が 25 万人を超えている。しかも過去 10 年来、機械化のレベルが急速に向上している。各集団軍毎に機械化部隊を保有している。それらの部隊とは、第 21 集団軍の第 62 機械化旅団、装甲第 12 旅団、第 47 集団軍の機械化 139 歩兵旅団、新疆軍区の第 6 機械化歩兵師団である。このほか第 4、第 8、第 11 自動車化歩兵師団がある。その上に 2 個武装警察師団があり、蘭州軍区の陸軍総兵力は、カザフスタン、キルギスタン、タジキスタン陸軍の総数を超えている。

装備の更新も相当迅速である。4 月 5 日、中国中央テレビは総政治部の歌舞団が新疆軍区で演出するのを放映した。放映画面の背景に置かれていたのは、52 口径 155MM 自走砲、04 型歩兵戦闘車であった。同月、蘭州軍区は、中国中央テレビで 2 回目の番組を放映した。題目は、(蘭州軍区の) 多くの機関幹部と下級兵士が新型武器の訓練を受けたとするものであった。画面に現れたのは、99G 型主力戦車、HQ-16 型地对空ミサイル、35 MM 対空砲、89 改良型装甲車、95 式弾砲結合系統等々であった。したがって中国陸軍が近年来装備してきた先進装備は、すべて新疆軍区にも入っていることが分かる。またコルラには第二砲兵の戦役戦術ミサイルが配備されている。

今のところ、中国軍がこのように新疆軍区、蘭州軍区の地上作戦戦力を重視する根

本的な理由は、第一は、NATO に対処するためである。特に米軍のアフガン進駐に対して中国は高度に重視してきた。今後、“一帯一路”戦略の進展に伴って蘭州軍区陸軍の責任範囲が国境外 1000 KM まで延伸されるのか？どのように前進するのか？一旦アフガンを支配下においた後、中国陸軍の前面に展開するのはイラン軍である。

成都軍区においては、陸軍は対インド作戦だけに重点を置いてはいない。機動性、国外への迅速な兵力投入に注力している。今回のネパールへの救災活動において、中国陸軍の航空化が確かに進展していることが示された。ネパールへの救災活動期間中、4 機の IL-76 が迅速に震災地区に入った。

一旦、“一帯一路”に含まれる国家に中国陸軍が進出しなければならなくなった時、まず最初に新疆軍区、西藏軍区が対処する。後続部隊は成都軍区になろう。第 13 集団軍は、陸軍航空第 2 旅団を保有している。新疆軍区には陸軍航空第 3 旅団、特種作戦旅団がある。第 14 集団軍には第 31、第 40 機械化歩兵旅団、第 32 山地歩兵旅団、第 18 装甲旅団がある。

西藏軍区には第 52、第 53 山地旅団、第 54 装甲旅団が編成されている。特に西藏軍区の軍事演習では、オフロード車、相当の数の MI-17 型ヘリ、89 装甲兵員輸送車、96A 主力戦車、105 MM 自走砲等、大量の新型山地戦装備が出現している。

中国陸軍の“航空化”が進んだ場合、成都軍区空軍は、新たな輸送特種師団を設立し、多くの Y-8 シリーズ輸送機を装備するであろう。元の第 4 輸送機師団の所在地 QIONGLAI では飛行場の拡張工事が行われている。2012 年、同飛行場には 2 本の滑走路が完成し快速反応能力が高まった。2015 年 2 月、同飛行場に 15 機の Y-7 輸送機、14 機の Y-8 輸送機が駐機していた。貴陽の磊荘は、2007 年から飛行場の拡張工事が始まり 2015 年には 18 機の Y-8 輸送機が配備された。このように中国西部地域の航空輸送、空挺能力が大幅に高められている。この地域では Y-8 型輸送機だけで 32 機が配備されている。

2015 年 1 月、漢中航空機会社は Y-8 輸送機を急速生産中である。総数は 23 機に達し、一部は Y-9 型で、高新技术の偵察機の可能性がある。

陸軍海戦隊の建設

上記中国陸軍少将の論文では、海上の“一路”を“従”とし、次要の補助攻撃の方向であると述べているが、論文中で米国は中国の海上交通路を阻止する能力があると述べている。しかし實際上、中国陸軍の海戦能力は、台湾作戦準備の積み重ねによって、逐年大きく強化されている。中国陸軍の渡海作戦能力は米国陸軍に次いで世界第 2 位である。第 31、第 42 集団軍内には 2 個の陸軍両用機械化師団が編成され 05 型水陸両用突撃車が装備されている。陸軍はまた、2015 年に初めて 3000 トン級ドック型揚陸艦を就役させた。中国陸軍は、海上の“一路”を守るため、遠洋に、或いはインド洋に兵力を展開する能力がある。

以上